

英詩に見る子供の姿 (二)

松原至大

母の夢 (ウィリアム・バーンズ)

ゆうべ、夢を見ましたの、
よく眠っていましたのに——
ああ、まざまざと今も今、
私を泣かせているのです——
私に悲しみを残して行つた
私の幼い子供の夢。
ああ、生れては來たけれど、
育つてはくれなかつた子供の夢。
高い高い天に
その子の姿を見たかと思ひますと、
かわらぬおとなしい子供たちが
いつしよに列を作つて降りてくるのです。

どれも白百合のような白衣を着て、
手に手に明るいランプを持つて。
みんなはつきりと見えていました、
でも、たれ一人口をききません。

やがて私の悲しい思い、
私の子供の番となりました。
でも、手にしたランプには、
ああ、火がともつておりません。
私のいぶかりを解くために、
半ばふりがえつて私の子供がいきました。
「お母さんの涙が消したのよ、
お母さん、お泣きなさらないでね。」

イギリスの詩人バーンズ (一八〇一年——一八八六年)
この作は、わが國で御存じの方が少くはないと思う。

彼はケンブリッジ大學を出てから、牧師をしていたので、このような詩もできたのであろう。彼はドーセットンヤアの生れである。スコットランドの詩人、ロバートバーンズ（一七五九年—七九六年）と混同されないようにお願ひする。

わが子を追憶する詩として著名なものの中に、イギリスの桂冠詩人ロバート・ブリッジズ（一八四四年—一九三〇年）の作、ゆける子にがある。

ゆける子に（ブリッジズ）

完全な小さな身體、

お前には過ちも汚れもなく、

あふれる力と美しい大格の

頼しさを持つていた。

冷めたくかたくあらわではあるが、

人生の花と魅力とが

まだお前には残つてゐる。

お前の母の實はお前であつた——

ああ、も早や限りない喜びは、

彼女の心を訪れることがない。

お前の父のほこりもない。

ああ、彼は信仰の心を集めて、

彼の力をふるい立たせなければならぬ。

最後のつとめに私がお前を動かすと、

お前はひと動きして身振りして

私にこたえてくれる。

思いがけない頭の姿勢、

かわつた形の美しさ、

それが私のめしいた愛を驚かせる。

お前の手はし馴れたように

私の指をつかんで握る。

けれどその握りは「死の握り」だ、

心も破れるばかりに、しかもかたい。

でも私の手には會つて握つてくれた

お前の意志と喜びと信頼とを感じる。

こうして私はお前をそこに横える、

お前のくぼんだ眼は閉ぢて行く——

さあ、お前の最後の小さなベッド、

お前のひつぎの中に寝ておくれ——

お前の利口な悲しい頭を支えながら、

お前のかたい青い手を

胸に組ませておく。

では、靜かに。

これでお前は満足かしら——
死、彼はお前をどこへ連れて行くのか。

この災難を正す世界へ、
そう私は思う。

私が見そこなうこの幻、

この身體のために泣くのはたれ、

お前をあたためて

眼さめさせようとばかりするのはたれ。

ああ、私のすべての望みは

このくらやみの中では、

なんの役にも立たないのだ。

この悲しみをのぞくためには、

私たちを慰めるためには。

しかたなしに私たちは

ただ事をはこんでいる。

私たちが見てきたこと、

私たちが知つてきたこと、

私たちが聞いてきたこと、

それはみんな私たちを見捨てている。

悲痛という言葉を通りこしているように思えるほど深刻
なこの詩は、彼が醫師出身の詩人であつたから、とばかり
は、片付けられないであらう。彼は英詩人の中でも、最も

教養のある詩人の筆頭に数えられて、その言葉の自在な驅
使とリズムの美しさとは、英文學史上に特記されている。
私の拙い譯では、とうていそれを移し得ないが、詩の深刻
さは、覆いようもないように思えるのである。

申し上げるまでもなく、これはわが國の流儀でいつて、
納棺の日の思いをのべたものである。いかに科學者出身の
詩人とはいえ、子を思う至情は、私たちの心と少しもかわ
つていない。涙にめしいた愛情一途の叫びといえないであ
らうか。彼は一九一三年七月にアルフレッド・オースティ
ン（一八三五年——一九一三年）の後を次いで、イギリス
における詩人の最高名譽とされている。（つゞく）

x

x

x

x

x